

# これからの時代に向けた教員養成のあり方

齋藤正俊

## I はじめに

ニュース等でささやかれる教員の世界は仕事の量的なことから捉えると「ブラック」と言われている。特に中学校の教員は、部活動の付き添いや生徒指導への関わりとの時間がかかるため、勤務時間が長時間に及ぶと報告されている。

採用についてみれば、小学校でも4倍程度あり、中高に関しては10～20倍は、どの府県でも同じであろう。かつて大阪府において一時70倍の時があった。

このような現状を目の当たりにした学生は二の足を踏み、教職を目指すことに意欲がわかないのが現状であろう。

また、時代は教員でもアクテブラーニングの授業、ITや情報機器の操作ができなければならない時代を迎えており、年配の教員にとってもつらい職場になっている。

かつては、自分の想いを子供たちに伝えることのできる職業であり、教職を目指す時点でそれなりの理念を持っていたが、現状では教職は魅力的な職業ではなくなっている。

このような現状を踏まえて、これからの教員養成についてどのような視点に立てば良いのかを考えていくことにする。

## II 学生の状況

教職を目指す学生を前にするとき、大学の教員はこれだけ教員を目指す者がいるのかと、うれしく思う一瞬がある。しかし、授業が進むとともに、居眠りをする学生が増えてきて、授業

者は授業が面白くないのか、教職を目指すのではなかったのかなどと悩むことになる。

学生を見ると、2極化が見られる。是が非でも教員になりたいグループ、そして、教員免許だけを目指すグループである。しかし、この二つのグループでも微妙に意識が一致するところがあり、それは、学生の後ろに保護者がおり、保護者が教職に就かせたい想いが強く、学生にプレッシャーがかかっている状況も感じるのである。

学生自身の希望でなく保護者の希望が教職なのである。このような人達は教職希望者、免許取得希望者の両者にわずかながらいる。

## III 教員の資質能力について

教員の資質能力を学生たちに伝えるとき、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、生徒に対する教育的愛情、教科に関する専門的知識、広く豊かな教養、と型どおりの指導をする。これは不易の部分である。さらに、世界の流れを考え、グローバルな視点・国際社会で通用する考え方、併せて変化に柔軟に対応できる能力等もあげられる。

考えれば、基本的に教員養成というのは「人が人を教員として育て上げる」という仕事である。教員は、どの校種においても、豊かな人間性が必要になり、信念めいた気持ちを持ち合わせなければならない。従って大学の教員としては小・中・高の教員を目指す学生に信念を持って接しなければならない。

校種によって違いがあるかもしれないが、再度

資質能力について考える時、幼・小では子どもに寄り添うことができることであろう。学校は社会性を学ぶ場ではあるが、幼・小においては教員に求めるのはまだ父、母的な存在ではないだろうか。特に低学年は、身体接触を求め、よく教員の足にまわりついていてのを見かける。そうしながら、教員の目を通して社会を見て倫理観や協調性等を学ぶのである。

次に中・高はどうであろうか。子どもも児童から生徒と呼び方が変わり、彼ら自身も思春期を経験し、将来も見えてくるので進学が頭にあり教科の教員を求めるのであり、専門家としての教科の指導力が必要となる。だが、彼らにしてもやはり教員の目を通して社会を見ることに変わりはなく、常に教員の行動に目をこらしている。

人間の脳は10歳前後で中枢神経系は100%になるので、ほとんど理解することができ、運動も即座の脳としてゴールデンエイジを迎えている。年齢的に感受性が強く、中高生では自分の心に響く何かを求めている。教員は、自分の理念的なものを学校生活での姿勢や教科指導の中で見せなければならぬ。これらのことも一般的な資質能力と併わせて必要な事である。

#### IV 現状を踏まえた教員の関わり方

大学の教員の使命は教育と研究である。故にそれに沿った動きをしなければならない。研究をないがしろにするわけではないが現状としては、教育6、研究4の割合ぐらいの力で学生の将来を考えた教育をしなければならないであろう。そのため、個々の学生をよく知る必要がある。学科となれば大学と言っても小集団である。この強さを利用し学生についてよく知ることである。

中・高の教員は常に情報交換を学年会等の会議を通じて、担任でない生徒の状況もよく知っている。大学なので、このあたりは共通理解が必要であるが、大学の教員は、学生の情報を持ちながら、自主的行動を促すための指導と、教職を目指す学生には人（子ども）のためにどうするかของ 思考法を学ばせる・促すことが必要である。

#### V カリキュラムと大学教員の関係

教職課程の講義中で常に「教員とは」と啓蒙する事が必要である。中・高の採用試験の状況は特に保健体育科の教員に至っては、兵庫県の現状では、男子15人に対して女子2人の割合である。故にしっかり取り組むように教職課程の担当者が講義において常に言い続けることが必要である。主体性がない、と思われるかもしれないが最近の学生は自分の意志が弱く、あっても気持ちを前に出すことができずにいると思われるので、それを良い意味で仕向けていくのが大学教員の意識として必要である。

#### VI 最後に

最近の学生は、してもらうことに慣れ過ぎて自分では何事もできない事が多い。自分でせず、うまくいかない時は、誰かに責任を転嫁して、自分が傷つかないようにしていること多いように思われる。そのため、これからは「自分の意思を持つ」教育が必要なのではないだろうか。

この考え方を大学教員は、自分で責任を取る、からはじめ、自分で自分の意思の下に進んで行く行動力＝生きる力をつけてやらなければならないようだ。

結論めいたことを書けば、大学教員も、一丸となって教職を志す学生を育てる意識をしっかりと持ち、対応しなければならない、ということである。

20年ぐらい前までは環境が人間を育てていた部分もあって、大学の雰囲気も教職に向かわせた部分もあったが、環境が人間を育てる時代は終わり、自分でなんとかする時代になっているが、学生の意識がそこまで行っていないのである。それであれば教員が意思を確認し引きあげるしかあるまい。